



## リック・ルービン、ニール・ストラウス著

### 『リック・ルービンの創作術』

### 「自然という教師」より

私たちが体験できるありとあらゆる偉大な作品の中でも、決して色あせることのない究極の存在が自然だ。私たちは四季を通じて、自然が変化してゆくさまを目撃することができる。山でも、海でも、砂漠でも、森でも、その変化を目にすることができる。月の形や、月と星との位置関係が毎晩変わるのを見ることができる。

自然の中になると、驚きやインスピレーションを感じさせてくれるものに事欠かない。もし、自然の光と影の中に変化を見出すだけの生活を送れば、絶えず新しい発見をすることになるだろう。

自然を称賛するのに、自然を理解する必要はない。それはすべてのことにあてはまる。偉大な美に触れて息をのんだ瞬間に気づきさえすればいいのだ。

それは黄昏時の薄暗い空を鳥の群れが隊列を組んで飛んでゆくのを目撃した瞬間かもしれないし、樹齢数千年のセコイアの巨木の下で畏敬の念に打たれて立ち尽くした瞬間かもしれない。自然には限りない英知が秘められていて、それに気づいたとき、私たちの中で可能性が目覚める。私たちは自然との交信を通じて、自分自身の本質に近づいてゆくのだ。

色見本帳の中から色を選んでみたところで、選べる種類には限りがある。しかし、自然の中に一歩足を踏み入れてみれば、そこには無限の色のパレットがある。石のひとつひとつにも限りない色のバリエーションがある。それとまったく同じ色の絵具を見つけることなんてできやしない。

人間にはレッテルを貼って分類し、数を減らして制限する傾向がある。自然はそんな傾向を超越している。自然の世界は私たちには計り知れないほど豊かで、入り組み、複雑で、私たちが思っているよりもはるかにミステリアスで美しい。

自然界とのつながりを深めてゆくことが私たちの精神を豊かにする。私たちの精神を豊かにするものは必然的に、アーティストが生み出す作品を豊かにする。

自然界に接近すればそれだけ早く、私たちは自分が自然の一部であることを実感できるようになる。創作を行うとき、私たちは自分の個性だけではなくて、究極の存在である自然と切れ目なくつながっていることも表現しているのだ。

リック・ルービン、ニール・ストラウス著『リック・ルービンの創作術』 浅尾敦則訳 株式会社ジーン

2024年



谷文晁 《観瀑図》(部分) クリーブランド美術館